

安楽死と日本社会

- 文化・価値観・制度からの考察 -

芝 智大

本研究では、安楽死をめぐる議論を日本社会の文化・価値観及および制度の観点から考察するものである。近年、医療技術の発展により、生命の延命が可能となる一方で、終末期医療や自己決定権の在り方が社会的課題として注目されている。オランダ、ルクセンブルク、カナダなど、安楽死制度を導入する国が増えている一方で、日本では安楽死は法的に認められていない。その背景には、日本独自の死生観や価値観、日本の法的制度が影響していると考えられる。

本研究の目的は、日本において安楽死が制度化されていない理由を、法制度、仏教の死生観、日本人の価値観の特徴から明らかにすることである。

研究方法として、第一章では、安楽死および尊厳死の概念を整理した上で、安楽死・尊厳死を認めている国について見ていく。第二章では、日本の法制度に焦点を当て、刑法における安楽死の分類と概要を整理し、関連する判例を通じて司法の判断を検討する。第三章では、日本で最も信仰者数の多い仏教の死生観を手がかりに、日本人の死生観について整理する。また、実際のアンケート結果や個人事例を用いて、日本人の安楽死に対する価値観や相違について考察していく。第四章では、これらの考察をふまえ、日本における安楽死導入の可能性と課題について検討する。

本研究を通じて、日本において安楽死を導入することは、現状のままでは非常に困難であることが明らかになった。理由は、安楽死の判断が医師個人に集中していること、安楽死をめぐる決定には介護体制や福祉環境、家族や周囲との関係性が大きく影響するが、日本ではそれらの環境整備が不十分であることなどである。また、選定条件をしっかりと決めていかなければならないことも、慎重な姿勢が必要な要因となっている。